

東京オリンピックに向けて（1950～1964） その1

《高度成長期、襲いかかる流域都市化》

1955年（昭和30）以降、実質経済成長率が10%を上回る高度成長期が17年間続きます。（注1）国民総生産（GNP）は、1968年（昭和43）に、ドイツを追い抜き世界第2位になります。では多摩川流域は、どのような影響を受けたのでしょうか。

まずは、人口が急増します。東京都23区は、1955年（昭和30）には人口が戦前まで回復したうえ、そのころから集団就職（注2）が始まり、都心や京浜工業地帯は、すさまじい人口増加が続きます。（注3）また都心から溢れた人口は、多摩川流域へ流出し、鉄道駅周辺から活発な宅地開発がなされていきます。

1950年代は、白黒テレビ、電気冷蔵庫、電気洗濯機が、1960年代は、カラーテレビ、クーラー、自家用車が新3種の神器といわれ、それらが急速に普及してライフスタイルも激変していきました。製造業以外にも、テレビ、漫画業界など、新しい産業が登場してきます。

しかし、新しい社会的課題が噴出してまいります。水資源不足、水質汚染、自然破壊、交通渋滞、居住地不足などなどです。それでも、東京圏の仕事と憧れに吸引されるかのように、人口集中は止まりませんでした。

注1：政府は、経済企画庁を新設し、翌1956年（昭和31）の経済白書において「もはや戦後ではない」と宣言します。

注2 東京都の人口ピークは、1975年（昭和50）。（国勢調査より）

	1955年	1965年	1975年
東京都	8,037	10,869	11,674
区部	6,969	8,893	8,647
大田区	568	756	691
世田谷区	524	743	806
市町村部	1,068	1,976	3,027
神奈川県	2,919	4,431	6,398
川崎市	446	855	1,015

写真は、①集団就職 (WEBRONZA掲載写真)、②3種の神器 (HP「昭和レトロ家電記念 電化製品の収集 三種の神器 偉人の足跡をたどる!!」の掲載写真、③高度成長期の概要 (HP「戦後の日本経済の歩み 高度経済成長期」(TERUO MATSUBARA)掲載資料)、④多摩川流域の市街地変遷 (水の文化第48号掲載図より)



